

社会科

総合人間科は地理のレポート学習にどのように生かされているか

佐藤 俊 樹

【抄録】 総合人間科への取り組みが他の教科の学習にどのように影響するか。「総合的な学習」の完全実施が間近に迫ってきた今、レポート学習という形式ではあるが、総合人間科での経験が生かされている点を生徒に対するアンケート調査によって探ってみた。その結果、資料探査やプレゼンテーションなど技術的な面から、自ら学ぶ姿勢の育成という学習の本質的な面まで、さまざまなメリットがあることがわかった。

【キーワード】 関心・意欲、資料探査、フィールドワーク、プレゼンテーション、自ら学ぶ

1. はじめに

1989年改訂の中学校学習指導要領に示された「四つの観点にもとづく評価」の観点のうち、「関心・意欲・態度」がトップに位置づけられ、従来最重要視されていた「知識・理解」が4番手に落ちてしまった。このことから、知識中心のあり方から、個性を生かし、自己教育力を養う姿勢に変化していくことが必要であると考え、レポート学習に取り組んでいる。1昨年（1997年度）の本紀要で「自ら学ぶ意欲を育てる中学地理の課題レポート—1年目の中間報告—」と題して、レポート学習に取り組むはじめて最初の1学期の状況を報告させていただいたが、2年たって私自身が多少なりとも要領がつかめてきたり、目を通したレポートが800作品に近づいてきたりしたので、このあたりで前回よりもくわしい形でまとめようと思う。

さらに、本校では1995年から「総合人間科」の実践に取り組んでおり、総合人間科を経験した生徒が既存の科目である地理にその成果をどのように出すかという点にとっても興味をひかれる。そのため、学年末には生徒にアンケート調査を行って、生徒の声をきいてみた。本稿はこのアンケートをメインに構成したものである。

2. 1998年度のレポート学習

昨年度は担当した4学年のうち、中1・中2・高2の3つの学年でレポート学習に取り組んだ。もう一つの学年である高3には、受験勉強を考慮して課さなかった。各学年のレポート内容と回数は以下の通りである。

(中1)

国名 の **事項** という形式のタイトルで調べさせる。

〈例〉カナダのエスキモー、インドの紅茶
夏休みと冬休みの2回提出。

(中2)

形式も提出時期も中1と同じだが、第2回は日本国内からテーマを見つけてださせ、自宅付近などのフィールドワークも認めた。

(高2)

- ・第1回：1学期末試験100点満点中20点をレポートによるものとした。内容は教科書の図表に記載されている国際紛争の例から1つを選んでレポートするというもの。〈例〉フォークランド紛争・北アイルランド問題・パレスチナ問題
- ・第2回：夏休みに地域調査を行わせた。ただし全員が身近な地域のフィールドワークというわけではなく、教科書の地域調査のページにあるように資料による調査（とくに外国）も認めた。
- ・第3回：冬休みに、酸性雨・オゾン層破壊などの環境問題を各自で1つとり上げレポートさせた。

3. アンケート項目

上記の3つの学年の生徒たちには、3学期最後の地理の授業を利用してアンケート調査に答えてもらった。調査項目の要約は次のとおりである。

- (1) レポートのタイトルを覚えているか
- (2) レポートの提出は守れたか
- (3) レポートには意欲的に取り組めたか
- (4) レポートと定期考査のどちらが好きか
- (5) 成績評価にレポートと定期考査のどちらを多く取り入れてほしいか

- (6) 1回のレポートを書くのに要する時間
- (7) 1回のレポートを書くのに利用する本の冊数
- (8) レポートを書く場所
- (9) レポート執筆は単独か協力か
- (10) 自分でより充実感をもったレポートはどれか
- (11) 文献調査と実地調査（フィールドワーク）のどちらが好きか
- (12) 総合人間科に取り組んだ経験が地理のレポートに与えた影響 [自由筆記]

4. アンケート結果

では、(1) から順にアンケート結果をみてみる。

(1) アンケートを行った時点では、生徒は自分の書いたレポートを持っておらず、記憶がたよりとなった。ほとんどの中学生が思い出せたのに対し、高2の生徒の1学期末考査時のテーマの欄は空白が目立った。

- (2) 中1：夏90.0%，冬91.3%
中2：夏94.9%，冬96.2%
高3：1学期末83.8%，夏81.1%，冬81.1%

それぞれのレポートを50点満点で採点し、評定に加味すると伝えてあったこともあって、おおむね提出率は高かった。ただし、1回も提出しなかった生徒が、中1で2名、中2で1名、高2で2名いた。これらの生徒は必ずしも定期試験の点数が低いとは限らない。むしろ、傾向の似かよった総合人間科で苦勞していることが特徴である。調べること、発見することに喜びを感じず、面倒くささばかりが先に立ってしまう生徒。こうした子どもたちをどのように叱咤激励して取り組ませるかが大きな課題である。

(3) 回答は4つの選択肢によった。

- ①. とても意欲的だった
- ②. どちらかといえば意欲的だった
- ③. あまり意欲的になれなかった
- ④. 全然意欲的になれなかった

	①	②	③	④
中1	30.2%	42.1%	22.4%	5.3%
中2	37.2%	47.4%	14.1%	1.3%
高2	15.6%	53.1%	21.9%	9.4%

中1と中2を比較すると、「とても意欲的だった」「どちらかといえば意欲的だった」の合計が、中1が72.3%に対して、中2は84.6%と10ポイント以上

の差がついた。この差の生じる原因として考えられるのは、総合人間科の経験が1年ちがうことよりも、この年度の中2という学年が何事にも積極的であるという特長の方があてはまると思う。中1の男子には1枚書くのが精一杯という生徒が何人もいた。(下の図1)

中学生に対し、高2の意欲は明らかに低い。(12)のところで総合人間科との関係を自由筆記してもらったが、さすがに高校生ともなると4年にわたる総合人間科の経験から、冷静に分析している記述も何人かにみられた。その一方でレポートに限らず学習活動全般に低意欲な生徒も増えている。学年の進行とともに学習意欲を失う生徒が増えていくという状況が浮かび上がってくる。

原子力発電所の事故

併録

1979年/ウイットスケール/イギリス
1986年/チェルノブイリ/ソ連
1989年/チェルノブイリ/ソ連
1990年/ゴンドワ/アメリカ
1990年/ニューヨーク/アメリカ
1979年/プランス/フランス/アメリカ
1979年/ウイットスケール/イギリス
1979年/スリランカ/スリランカ/アメリカ
原発事故について
上の原子力事故件数は見れば、本誌は、1978-1979年までにはさきわけてアメリカにも事故が
多発した。これは、1978-1979年の間アメリカの原発の閉鎖の理由に、問題点を挙げて
かく、原発事故が原因と考査される。(6は推測)

1979年/ウイットスケール/イギリス
1986年/チェルノブイリ/ソ連
原子力発電所、核事故は世界最大の悲劇
放射能を帯びた雲がヨーロッパに広がり、
日本人の工場周辺の住民が放射能汚染中
に死亡。

「再処理のしくみ」

死の原素を工場へ運ぶ
一部は燃料棒を再処理
して、残った燃料棒を
再処理する

⇒

「フィールドワーク」
「再処理のしくみ」
「原子力発電所の事故」
「放射能汚染」
⇒

「再処理のしくみ」
⇒

「再処理のしくみ」
⇒

「再処理のしくみ」
⇒

図1

(4) と (5) は同じような結果が出た。これは質問内容からみれば当然かもしれない。

- ①. レポートの方が好き (多く入れてほしい)
- ②. 定期試験の方が好き (多く入れてほしい)

	①	②	その他
中1	75.0%	22.4%	2.6%
中2	77.9%	22.1%	—
高2	75.8%	15.1%	9.1%

※ (4) の回答による
その他には「どちらともいえない」や「どちら
もイヤだ」という回答が入る。

どの学年もレポートの方が定期試験よりも好き

で、成績にもより多く評価してほしいと思っている生徒が多いが、理由はまちまちである。次におもなものを紹介してみる。

- ・他人が作った問題を解くのではなく、自分が疑問に思ったことをいろいろな本・テレビなどで調べることができるから。(中1)
- ・自分の調べたいことができる。決まったことじゃなく、自分が学びたいものが学べる。(中1)
- ・勉強が苦手でも、地理が好きな人もいるので。そんな人が頑張れるのはレポートぐらいしかないから。(中2)
- ・詰め込みで勉強しなくてすむから。レポートだとそれまで知らなかったことを知ることができたりするから。(高2)

他にもユニークな意見があった。

- ・テストは勉強すれば点がとれるのでいい。レポートは時間がかかるし、まとめ方によっては評価がかわってしまうので好きではない。(中1)
- ・定期考査にレポートのまとめが出ると面白い。

(中2)

この2つのうち、前者の意見は評価の難しさを突いているし、後者は新しい試みとしてとても面白いと思う。

(6) レポートを書くのに要した時間

少ない方は1時間から、多い方は48時間・150時間・3週間、はたまた2カ月という生徒までいた。比較的回答が多かったのは5時間と10時間で、中2には20時間が7名、24時間が5名いた。

こんなに開きができてしまったのは、実際に筆記具を持って机に向かい、レポートを書いている実質時間だけを答えた生徒と、文献探査をしたりフィールドワークを行っている時間まで含めた生徒の両方がいたことも原因の一つである。

5時間程度では本を読んで、そこからレポート用紙に書き写すことで終わってしまうだろう。自分らしさを出して、意見を多く入れたレポートを書くには10時間以上は必要になってくるはずだ。

24時間(丸1日)かけて書いたと答えている中1の生徒の2回目のレポートの「感想」に書かれていることを紹介する。

『夏にやったレポートを返してもらったとき「本を丸うつし・・・」と先生に書かれていて、これじゃいけないなと思いました。だから今回は、まず本の内容を全部読み、自分なりに言葉をかえていくことから始めました。難しい言葉は辞典で意味を調べて、自分が後から見て充分内容が理解できるようにしました。あとは、絵や

記号を増やして、楽しみながら書きました。レポートは2回目なので、スムーズにできてよかったです。レポートを書いていると、不思議なくらい内容が頭に入ってきました。機会があれば、また宇宙について調べてみたいです。』

彼女の評価はもちろんAだった。

(7) レポートを書くのに読む本の冊数

どの学年も平均3~4冊、最高10冊で共通していた。ただし、読んだ本の数とレポートのできばえとは強い相関はない。平均的な3~4冊と答えた生徒の方が、資料に振り回されることなく、自分の頭でじっくり思考することができて、オリジナリティのあるレポートになっている。

(8) レポートを書く場所

圧倒的に自宅が多く、図書館や教室と答えた生徒はわずかであった。

(9) レポート執筆は単独か協力か

共同研究を認めず、個人研究の形態をとるよう指示したため、1人で書いた者がほとんどであった。図書館で書くことと答えた者の中には友達と一緒に書いたとした者もいたが、わずかであった。

(10) 1年間のどのレポートに充実感があったか

中学生は1年生も2年生もレポートに取り組んだのが初めてであったため、書き方がわかってきた2回目の方に充実感を持ったとした者が多かった。

これに対し高2は、3回のレポートのテーマが異なっていたため、テーマの好みが発感に大きく影響した。どれが最も充実していたかというと

第1回：地域紛争 9.7%

第2回：地域調査 51.6%

第3回：環境問題 38.7%

という結果であった。フィールドワークを要する地域調査に最も充実感を持つ生徒が多かったのは、総合人間科でのフィールドワークの経験が生かされたことに加え、総合人間科とはまた異なるフィールドワークを行えたことが新鮮であったのだろうか。

(11) 文献調査と実地調査のどちらが好きか

これは回答がはっきりと二つに分かれた。実地調査(フィールドワーク)を課していない中1には質問しなかった。選択肢は2つである。

- ①. 本や新聞を使って調べるほうが好き

②. 実地調査（フィールドワーク）を行うほうが好き

結果は以下のとおりである。

	①	②
中2	52.1%	47.9%
高2	67.7%	32.3%

フィールドワークは時間がかかるし、知らない人に話を聞くこともあるので緊張する。面倒だ。このように思っている生徒が多いと予想していたので、とくに中2では文献調査の方が好きだと答えた者とはほぼ同数であったのには少なからず驚いた。これも総合人間科で慣れていることと関係あるようである。

(12) 総合人間科に取り組んだ経験が地理レポートに与えた影響

さて、やっと本題である。アンケートでは「総合人間科に取り組んで、調査・研究・発表などを行う経験を積んできました。このことは、地理のレポートを書くうえで何らかの影響を与えましたか。考えられることを書いてください。」というように自由筆記で答えてもらった。その結果、数名の生徒が共通して回答してくれた事項がいくつか出てきた。以下に要約してみる。

①. 「まとめる」力がついた

中2のある女子生徒は、「総合人間科では、自分で調べたことをレポートにまとめるときに、『どうすれば読む人にとって読みやすくなるか。』とか『どうやって書いたら読み手にわかりやすいか。』など、いろんなことに気をつけて書きました。だから、地理のレポートを書くときも、写真とかを入れて、読みやすくなるように工夫するようになりました。」と答えている。文章だけではなく、写真や図表やイラストを取り入れて読み手にわかりやすいようにすることは、ことあるごとに伝えてきた。単に「まとめる」といっても、自分がテスト勉強するために授業のまとめのノートを作るのとはちがって、他人が読んでわかるようにまとめるのははるかに難しい。このことは⑤で述べるプレゼンテーション能力の向上にも関連している。

②. 資料を探査する能力の向上

「図書館の使い方が上手になった」とか「図書館と仲良くなった」など、図書館に関する意見が目立った。なかには「もっと本を充実してほしい」と、情報ソースの整備を求める生徒もいた。また、総合人間科でインターネットを経験したことが地理レポートでも役立ち、資料集めがスムーズにい

ったという生徒もいた。ただし、インターネット資料をプリントアウトしたものを、そのまま何の手も加えずに提出する生徒もいるが、これには困った。きれいな活字だし、美しい写真や資料も付いているのでつい高く評価しがちだが、労力的には本を丸写しした者よりも少ないことも考えられる。極力自分の意見を入れることを指導していくことが必要である。次に示す図2（1999年度春休みの宿題：新中2）のように自分のことばで要約してあるものは参考になるであろう。

⑤2. まとめ (参考のファイルURL: <http://www.gknet.or.jp/~twich/harbyu.htm>)

この年表は、起こったこと(年)は、元のファイル(地球環境関連史)から、転載(?)したもので、説明(感想)は自分で考えてかいたもの、辞典(広辞苑第四版、原色現代新百科事典 1988年初版、学研)などをひいて調べたものなので、間違っているかもしれません。ご了承ください(^^;)この年表を作った「鳥居仁司さん」は、このページ中にこのように書いています。↓

——「宇宙船地球号の乗組員の一員としての自覚をもち、ひとりひとりができることにいまずぐ取り組む必要があるとおもいます。」

例えば、酸性雨は越境大気汚染(越境型広域環境汚染)である。このような、国という範囲をこえた範囲(つまり、地球、世界)での環境問題はほかにもチェルノブイリ、温暖化、オゾン層破壊 etc. とにかく乗組員のうち、ごく一部の人が失敗(×なことをすれば世界にそれが広がる(典型的なのがチェルノブイリ)『運命共同体ってわけだな。』である。このようにならないようすること、あるいは、なってしまったものを復旧すること。それに、いまずぐ「取り組もうじゃないか!」そういうことをいっていると思うのですけれど(自信が無い)。

どうぞ、原文を読んで下さい、URLは上(Ⅱのはじまり)にかいてあります。このページには、オゾン層破壊、温暖化などいろいろありますので、総合人間科でも役立つと思います。

図 2

③. 他人への質問の仕方がうまくなった

「総合人間科でアポイントをとることに多少は慣れているので、冬季のレポートを書いているとき、市役所の方に質問することがスムーズにできた。」(中2)というように、総合人間科の特長を他の教科(科目)である社会科(地理)に生かしている。学校を出て学習する機会のない生徒にいきなりフィールドワークをやれというのは、話したや内向的性格のために重圧になることも多い。本校の生徒は、中1のときから総合人間科でいろいろな人にインタビューすることを学年全体で取り組んでいて、初対面の人に話をきく訓練を積んできている。中学でも高校でも地理の教科書には地域調査の項目があり、実際の調査例を示しながら調査の方法を説明してあるが、地理の調査につきものの地形図の読図を別にすれば、地域調査の分野は総合人間科とかなりの部分で重複することがある。

④. 自ら学ぶ姿勢ができた

- ・「自分でつき進む」という姿勢が身についたと思う (中1)
- ・私はいつも自分一人で何かをやるということに自信が持てなかったけれど、総合人間科の授業を受けていくにしたがって、だんだんどうすればいいのかわかってきました。だから、地理のレポートも最初は何をすればいいのかわからなくて重荷だったけど、2回目にはすごく楽しんで研究することができました。(中2)
- ・総合人間科では、今までの先生の話聞いて板書をノートに写すという授業とちがって、「自分で勉強する」ということを習った。高2の総合人間科では班で協力してきたから、地理のレポートでは改めて一人で考えながら学ぶということができた。(高2)

以上の3つの例が示すように、自ら学ぶ姿勢を総合人間科での経験を生かして築き上げている生徒が各学年に何人かいる。

この「自ら学ぶ姿勢」というのが、総合人間科が他教科に生かされる最大のメリットではないか、総合人間科を学ぶ意義がここにあるのではないかと強く感じる。

⑤. プレゼンテーション能力の向上

総合人間科では調査したことを報告書や研究集録のような形式で残すだけでなく、発表も1年のうちに何回か行っている。発表の場になれば、短時間で効率よく自分の研究内容を皆に伝えなければならないので、AV機器や実物映写機(プレゼンター)を駆使してプレゼンテーションに工夫を凝らしている。これに対しレポートの場合は紙に書いて提出するだけなので、総合人間科にくらべて力を発揮しにくい面もあるが、誰が見てもわかるように写真や自分で描いたイラストをつけて工夫している生徒が回を追うごとに増えてきて、プレゼンテーション能力が上がってきていることをうかがわせる。なかには新中2の春休みの課題で環境問題を調べさせたら、ゴミ問題をテーマにしてペットボトル・発泡スチロール・サランラップなどの不燃ゴミの燃焼実験を行い、燃えかすのサンプルを貼り付けて提出した生徒もいた。また、図3のように名古屋市のごみ処理場建設で話題になった藤前干潟に出かけ、写真を多く使ってルポルタージュ調に仕上げた新中2もいた。

地理レポートは総合人間科とちがって発表はない、と上で述べたが、アンケートでは発表の機会をぜひ持ってほしいと書いた生徒が数名いた。限られた授業時間の中で発表時間を捻出するのは難しいが、全員ではないにしろできればの良かった



藤前干潟に和らげたいと、ゴミ問題に取り組む生徒の姿。ペットボトルやサランラップが、前より少なくなっている。

左の左に写っているのは、「藤前干潟を守る会」の代表の皆さんです。ラッキーなことに干潟が広く見え始めたので皆さんも夏に参りました。18年間にこの干潟を守るために和らげ運動を繰り返して来ましたが、藤前島をながめながら皆さんは「以前はいつまでこの島たうがここにいられ、生き残りやうか」と不安な気持ちでながめていたけれど、今こうして安心して島たうをながめられることになり、本当にうれしく思っています。

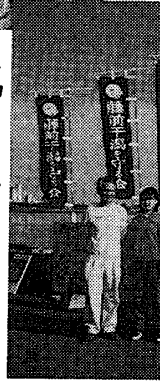


図3

者に限って発表させるのもおもしろい気はする。ただ、高2の生徒で「自分が感動したことを伝えたいのに、誰も真剣に聴いてくれない。発表によって周囲が変わったためしがない。発表ってことの意味が総合人間科にはない。」と発表に否定的な生徒がいるのも事実である。

⑥. その他

「文章を書くのがうまくなった」「調べる力がついた」「いろんなことと関連づけて物事を考える力がついた」など、ほかにもさまざまな意見が寄せられた。そんななか、高2の男子で「総合人間科によって既に書き慣れているというのは大きなメリットである。レポートを書くにあたって困惑せず済む。資料をただ書き写すだけでなく、自分の考えや意見など自己の表現をする余裕が生まれ、よりよいレポートとなる。」と、非常に的を得た指摘をした生徒がいた。

5. まとめと今後の課題

以上のアンケート結果のとおり、総合人間科に取り組んだことによってレポート学習にさまざまな良い影響を与えていることがわかった。とくに、人から教えられるのではなく自ら学ぶことが実は大変おもしろいことなのだ、ということに気づく生徒が回を追うごとに増えていく傾向がみられた。知識偏重の詰め込み教育から、自ら生き生きと学び「自己学習力」を向上させる教育へ、総合人間科もレポート

学習もかなり有効な方法といえるのではないか。

ただし問題点も多くある。現在私自身が気になっていることの一つに、提出をかたくなに逃れようとする無気力な生徒にどう対応するかという問題がある。レポート点が0点になるので成績評定に不利になる、という理由で提出を迫ったりしているが、もっと能動的な動機づけができないか、と思案考慮中である。

それからもう一つ、評価基準をどうすればもっと明確化できるかという問題もある。レポート学習を始めて3年間、ずっとA(50点)・B(40点)・C(30点)の3段階の相対評価を行ってきたが、試験問題のように正解と誤解がはっきりしているものではないため、評価に対して疑問を持つ生徒が毎回いる。また、「自ら学ぶ」姿勢を育てようとするのならば、他人との比較で評価を出すのではなく、その生徒の過去のレポートと比較してその成長ぶりを評価してあげることも重要かもしれない。

提出されたレポートに対しては必ずコメントを書き、次回以降の励みや指針にしようと思がけている。一つ一つのレポートの隅から隅まで目を通さないと的確なコメントはできないので、時間と労力は大変なものである。以前、A・B・Cの評価しか書かずに返したら、特にまじめに取り組んだ生徒から批判を受けた。レポート学習をさせるからには自宅での時間が削られるという相当な覚悟も必要である。

※本稿は平成10年度科学研究費補助金(奨励研究(B))による研究である